

親と子でまなぶ平敷屋の火たていむい

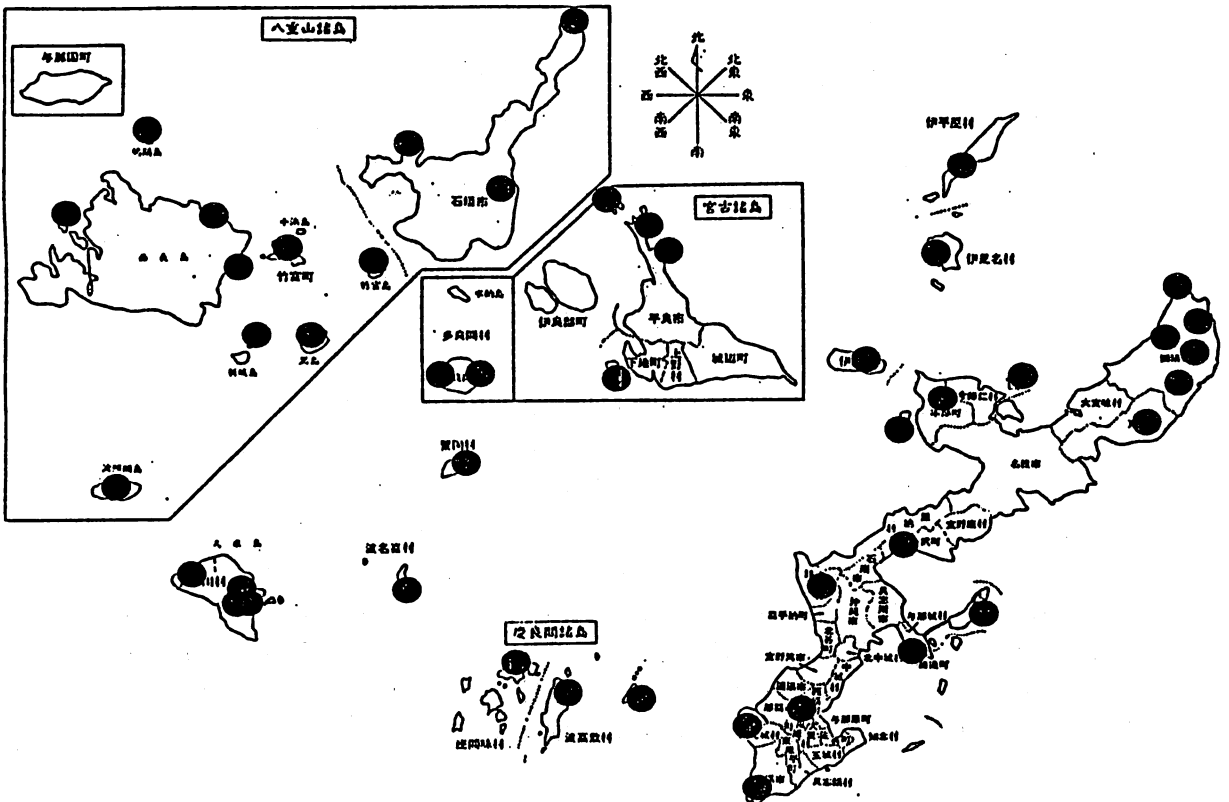
平敷屋小学校 金城明美
琉球大学教育学部 里井洋一

1、「火たていむい」とは

金城明美さんから七月に平敷屋小学校PTAで平敷屋の歴史を話して欲しいとあったのは五月のことであった。正直困ったが、ともかく彼女が赴任以来追求してきた「火たていむい」について考えることにして、私は調べ始めました。

約一月かけて「火たていむい」の起源を中心に調べ、次のようなことがわかった。

- ① 「火たていむい」は 火番盛、火立所、火たき盛、遠見番、遠見屋、遠見台などさまざまなバリエーションでよばれている。
- ② 「火たていむい」の起源は1644年のことだと「球陽」にある。
- ③ 「球陽」には、進貢船が一隻帰ってきたならば、烽火は一つ、二隻ならば烽火二つ、異国船ならば烽火三つを焼き、それを順次焼き次いで首里王府に伝えるとあること。
- ④ 「火たていむい」は下図のように全沖縄に分布すること。



- ⑤ 進貢船にたいする烽火は、明滅亡（1644年）後の動きにたいする警戒として、異国船にたいする烽火は、南蛮船（キリシタン）にたいする海防として設置されたこと。その後（里井洋一『「火立所」の起源にかんする考察』[「地域と文化61号」参照]

（里井洋一）

2、地域の人々といっしょに学びたい

勝連町与勝半島の端に位置する平敷屋は、黒装束に素足で舞う平敷屋エイサーで知られる所である。旧盆の夜などは、神屋の前で踊る勇壮な姿と乱れのない集団美を、一目拝もうとあちこちから見物客が集まる所である。そんな地域にある平敷屋小学校は、PTAの活動も一致団結した奉仕作業がなされている。ところがPTAの教養部に、頭を抱える問題が1つあった。それは「講演」と銘打った企画を組むと、参加者が非常に少なくなるということである。これまで、長時間座り続けておしりが痛くなるというイメージしか残らない講演会だったのかは知らないが、とにかく人が集まらないのである。そこで考じたのが、地域の文化に目を向けた教養講座の開設である。エイサーやたこ綱引きで有名な平敷屋地域に目を向け、語り伝わってきた事象を、歴史的見地から、改めて探り、掘り深めていく教養講座を開くわけである。講座の中で、きっと、新しい発見・新しい見方が生まれるであろう。そして、地域の人々の身近にあるものひとつひとつに目を向け、関心を深めるという新しいものの見方がわかってもらえれば最高である。そうすれば、教養部の悩みも一挙に解決してくるはずである。

地域に伝わってきた事象を、改めて歴史的見地から探るといふ新しい見方の必要性を感じたのは、二年前の講演会である。そのとき、講演して下さった高良倉吉氏は「按麻和利の貿易から探る歴史」について話され、一般的に悪評価されている按麻和利という人物を、彼の行った貿易の跡をたどることによって、違った按麻和利像を描き出して下さったのである。勿論、参加者は新しい歴史的人物按麻和利の出現を確かなものにしたに違いない。

その後、教養部は地域を新しい見方で探る企画をすすめていくことにしたわけである。「博物館見学」「やんばるの生き物と環境維持についての講演」（沖国大・宮城邦治氏）等の、地域を新しい見方で学ぶ学習会を進めてきた。そして、今回は里井洋一氏を招いて、地域に残る「火立森」に目を向け、大人だけではなく親子参加の討論会形式の教室を企画したわけである。聞くだけではなく、思ったこと感じたことの言えるのが討論会である。参加者にも楽しく議論してもらい新しい「火立森」像を見付け出してもらおうというわけである。そして、その討論を通して新しい見方の存在にも気付いてもらえれば幸いである。しかし、なぜ教養部主催の学習会に「火立森」を取り上げたのか。その訳を話す為に、私事

ではあるが二年前の事から話したい。

二年前、私は平敷屋小学校に赴任してきたのだが、その前は西表島にある小学校に勤務していた。西表島には 200年前から残っているというような歴史遺産が身近にあったため、驚くこと毎日といっても大げさではないほど感動させられっぱなしだった。その感動を私に与えてくれたのが「西表島を掘り起こす会」の学習会であった。転勤間近い頃、学習会の中で、南蛮船がやってくるのを見張ったといわれる「火立所」へ実際に登ったことがある。ナタで伐採しながら登り、高波を打つ海を眺めながら感慨にふけたのである。実は、平敷屋にも「火立森」があると子供から聞いた時、すぐ、「西表島を掘り起こす会」へ連絡を取ったのは、私が平敷屋へやってきた最初の5月である。何か関連がなかろうかと思い、「火立森」へ写真を撮りに行き、古さを感じさせる焼けた赤い土や石がなかろうかと調べたのである。じゃまな がかいすすきをかきわけ、ホワイトビーチを見下ろし、人家の向こうに宮城島を見ながら石を探した。だが、いくら探しても古い石らしきものは表出していない。私は、すぐ、あきらめた。しかし、まさかそのあきらめが、二年後のひらめきが変わるとは思わなかったのではある。

二年後、教養部は里井洋一氏を招く事にした。彼なら何かの古文書から平敷屋地域の新しい発見を紹介してくれると思った。氏へ依頼した。(氏が引き受けてくれた事は心から感謝している。) さっそく里井氏は、「平敷屋に何かおもしろい事はないか？」ときた。私は困った。(平敷屋朝敏は地域紹介のパンフにも載っているくらいだし、たこ綱引きは今年やるから公民館主催で何かお話し会があるはずだ。重ならないようにしたい。だから・・・) 「火立森」の事を調べてみてはどうかと提案した。二年前、私があきらめたものである！

「火立森」と地域に呼ばれている所は粘土層が灰色く表出している。掘れば何か出るのではないかと単純に思って「火立森」調べを提案したのだが、そんな私に対して里井氏は、遺物らしきものが表出していないのなら「火立森」は別にあるのではないかとすごい意見を提示した。二年前、すぐにあきらめて掘らなかつた私のあさはかな考えとは違い、別の視点で「火立森」をみたという里井氏のものの見方に私は感動し、教材づくりが始まった訳である。

3、探し歩いた教材づくり

「火立森」はどこにあるか？

これが今回の学習会のタイトルである。さっそく我々は、候補地を探すことにした。里井氏は古文書資料の方から探り、私は地域の方から話を聞いて探ったのである。学習会は討論型式である。親子で言い合わせるためには どちらが本物の「火立森」かと悩める候補地をつくり挙げなければならない。平敷屋出身の徳村安信氏に聞くところによると、現在呼ばれている「火立森」は灯台変わりに使っていたものでイカ漁をする漁師たちの目印になっていたという。そして、他にどこか高台になっている所で 何かあった所はないかという質問に、自衛隊基地の

側の高台に「遠見屋」と呼ばれる所があると話してくれた。その近くにはヒー
ジャーガマというガマもあり男子禁制の拝所になっているそうである。徳村氏の
話からすると「火立森」は外から侵入してくる船に対する警戒警報の役目を果す
のではなく、灯台変わりに目印として最近まで使われていたという事が推測され
る。やはり「火立森」は、別にあるのだろうか。（「火立森」の役目・造られた
年代等に関する事は里井氏説として後記。）

私が西表島で見た「火立所」は 確かに高台で地平線が曲がっているのが判る
くらい遠く海を見渡す事ができる所だった。それからすると平敷屋の「火立森」
と呼ばれている所より 徳村氏の話の中に出てくる自衛隊基地の側の高台の方が
立地場所としては似ている。それで我々は、西表島と同じくして1600年代に造ら
れたはずの「火立森」であろう候補地をそこにし、どちらが本物かを親子教室で
討論する事にした。現在「火立森」と呼ばれている所はA地点、自衛隊基地の側
の高台の方はB地点とした。

候補地が決まったので現地の写真を撮ってスライドにすることにした。A地点
の方は楽に撮ることができた。問題はB地点である。自衛隊基地周辺は訓練され
た軍用犬がうろうろしている。実は、里井氏はそのことを知らなかったのである。
私は以前、ヒージャーガマ（このガマは拝所で基地近くにある。戦争の傷痕が
残っているかも・・・と思い探しにいった。）と呼ばれる所へ行こうとした。その
時はなんと、遠くでほえる犬の声に驚いて逃げた経験がある。知らぬが仏とはこ
のことで里井氏は、ビクついて声も出ない松井貴子先生（平敷屋小）と私をしり
目に「ああ、いいながめだ。」と大声を張り上げてパチパチ写真を撮ったのであ
る。心配する松井貴子先生をおさえ、「いいよ、やらせとけ！」と写真の為なら
ば友情もくそもない私の一言で無事？写真は撮り終えた。その後すぐ、里井氏は
軍用犬のいることを松井先生から聞き、ひきつる声もなく三人三様そそくさ車ま
で走ったのである。これでなんとか命も無事！写真も無事！であったのである。

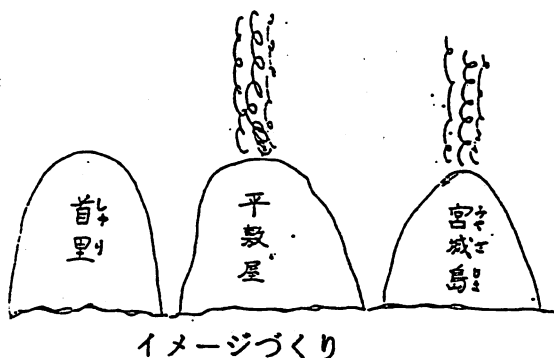
4、親子教室はじまる（7月19日7時30分）

いよいよ親子教室の日。古文書資料・スライド資料・OHP・図表を用意して
の討論会が始まった。「火立森」はどこにあるか。その事を討論するために、ま
ず、「火立森」の火がたかれ、次の「火立森」へ伝える様子をOHPでイメージ
化を図る。製作・操作は松井貴子先生が行う。

次に二つの候補地をスライドで紹介する。



A地は元部落の近くにある。小高い所だが宮城島が見え、地域の人々はそこを「火立森」と呼び親しんでいる。小さい頃そこでヤグワーを作って遊んだと言う母親はスライドを見て懐かしがっていた。B地はA地よりも高い所にあり、切り立った崖っぷちから、遠くに首里や宮城島が見える。スライドの途中、参加者のおばあさんから「うまー遠見屋やっさー」と言う声が飛び出る。



そして、スライド後、A地が「火立森」であると思うグループとB地が「火立森」だと思ふグループに分かれ討論した。討論となると遠慮ぎみになるのではないかと心配していた母親たちだったが、いやはや「遠見屋やさ」「あらん火立森やさ」と子供たち以上に盛り上がり始めてしまった。A地主張グループは大人が多く、B地主張グループは子供が多い。グループ内での話し合い後、次のような論争があった。

【A側】以前から「火立森」として呼ばれているのだから間違いない。部落の中にあるし、距離的にみてもけむりを上げるのにそう時間がかからない。

【B側】A地よりも高い所にあるし首里も宮城島もよく見える。海からやってくる船もよく見えるからB地が「火立森」であったと思う。距離的にはそう遠くはない。

【A側】いや、遠い。それにもし、けむりを上げたとしたらB地は風が強すぎてけむりはたなびかない。

【B側】たなびくってなんか？（爆笑）

【A側】けむりがまっすぐに上がらないと遠い首里から見えない。またB地までの坂道はわりと険しいので荷物を運ぶのに大変であるから、やはりA地が「火立森」である。

【B側】遠くからもよく見える所は高い所にあるB地の方で、首里からよく見えるはずだ。B地には馬でいけば早く着くし、馬なら険しい所でものぼる。昔は馬があったはずだ。

【A側】おじーがね。前は火が上がっていたってよ。Bの所はトォーミヤー（遠見屋）だはずよ。ウガンジュの所でしょ。・・・おばあちゃんいわく。

そして、クライマックス。里井氏の資料の紹介である。近世の地図を現代の地図と重ね合わせてみる。薩藩調整図にある勝連の「火立所」を現代の地図に重ねると、なんとB地のあたりになったのである。A地主張側は「エー。（ホントかしら？）」のざわめきが広がった。ざわめきの中、結論はそれでも「AかBかどっちが本物かわからない。」で終わった。答えは、しかけ人の我々もしらない。

しかし、意外性が興味の誕生である。身近なものへの新しい歴史的興味が、これでまたもっと「火立森」探求につながっていくであろう。我々の親子教室も楽しく盛り上がり終る事ができた。約1時間の討論会であった。その後、30分程父母と薩藩調整図や「火立所」などのミニ座談会を持ち、最高齢者の参加者のおばあちゃんに貴重な話しを聞かせてもらった。感謝 感謝である。

5、家でも討論会

その日、参加した子供たちの何人かは家でも祖父母と討論会をしたらしい。聞くと二つの候補地以外のそれらしき場所も出てきたとか・・・。

私も二学期に入り、授業を通して改めて「火立森」討論会を持った。「先生、もしかして「火立森」は二つあったんじゃないか。」「Bで見付けてAでけむり上げるとか。」「先生、「火立森」は いったい いつからあるのかな。」など、おもしろい視点が生まれたのには驚きである。私は いつ頃からそんな見方・疑問が持てなくなったのだろう・・・と思うこと至極である。ほんとうに、いつまでも、子供たちは、そんな見方を忘れずにいてほしい気がする。

そして今回、教材づくりに取り組む姿勢の大切さをも強く感じた。また、つくる側も 歴史観・討論会観・人間観を探りながら取り組んでいくと「熱中できる楽しさ」を感じることができるのではないかと考えさせられた。

(金城明美)

6、「二つの火たていむい」論争の教材づくりの意味

前記のようなことを、平敷屋小学校の先生、金城さんや松井さんそれに安里さんに説明をした。みなさん難しいという顔をなさっている。このままでは金城さんのいう「おしりが痛くなる」ということになりかねない。

そこで、次のような発問を提案した。

地図上(図1)のA・Bどちらが『球陽』でいう火立森でしょうか。

金城さんの調査によると地元ではAを「火立森」とよんできた。(沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書V-中頭方東海道-』にも写真および地図上図示でAを火立森とよんでいる。)ところが、私が調べる中で出会った「薩藩調整図」には、平敷屋の「火立所」はBの所にあることを私は発見した。平敷屋小学校の三人の先生方は私の発見に驚き、「おもしろい」とのってくれたのみならず、じゃあ、地元で「火立森」とよんできたAは何なのさ。Bは地元では何と考えられているのか。まさしく「A・Bどちらが火立森なのか」という視点で追

求をはじめたのでした。(前述の徳村証言にいきつく)このようにして、講演をひきうけた私のもことから、この「発問」によって私と平敷屋小学校の先生方との協同教育内容研究・教材づくりになった。

この「発問」によって議論がもちあがるかどうかは、大人であるPTAの「Aを「火立森」と呼ぶ」強固な信念に対抗してどのように議論をふっかけるかにあった。そのためにA・B二地点の現地から見える景色をスライドにすることは重要なことであった。

七月、平敷屋小学校の短縮期間中、二人の先生と生徒諸君とA・B二地点にかけた。連絡先である首里や与那城の烽火である宮城島をみわたせるのみならず、視界が四方遠くみわたせるB地点(近世の烽火)と平敷屋の港(現ホワイトビーチ)をみわたせるのに絶好のA地点(灯台)を意識して撮影した。この具体的光景からA火立森説に対する反論素材としたかったからである。

しかし、これだけではまだ不安だった。大人の信念、特に伝えられてきた伝承であるが故に、スライドから疑問を提示する人の出現が期待できないと予想できたからである。先生方と相談の結果子供たちの登場となった。ここに「親子教室」構想が登場した。

当日の「親子教室」の核は討論だった。松井さんはA・Bどちらかを選択させたら、A支持はA集団として、B支持はB集団として場所を移動させた方が好いと主張された。総意で松井説を採用することにした。(その理由は同じ考えをもった小集団の中では確認もしやすいし修正もしやすい。相手を意識して集団が団結しもりあがるという点にあると考え私は考えた)

そのような段取りをして当日になった。なおも大人が議論するかどうか不安であったが、その心配は見事にうちやぶられた。

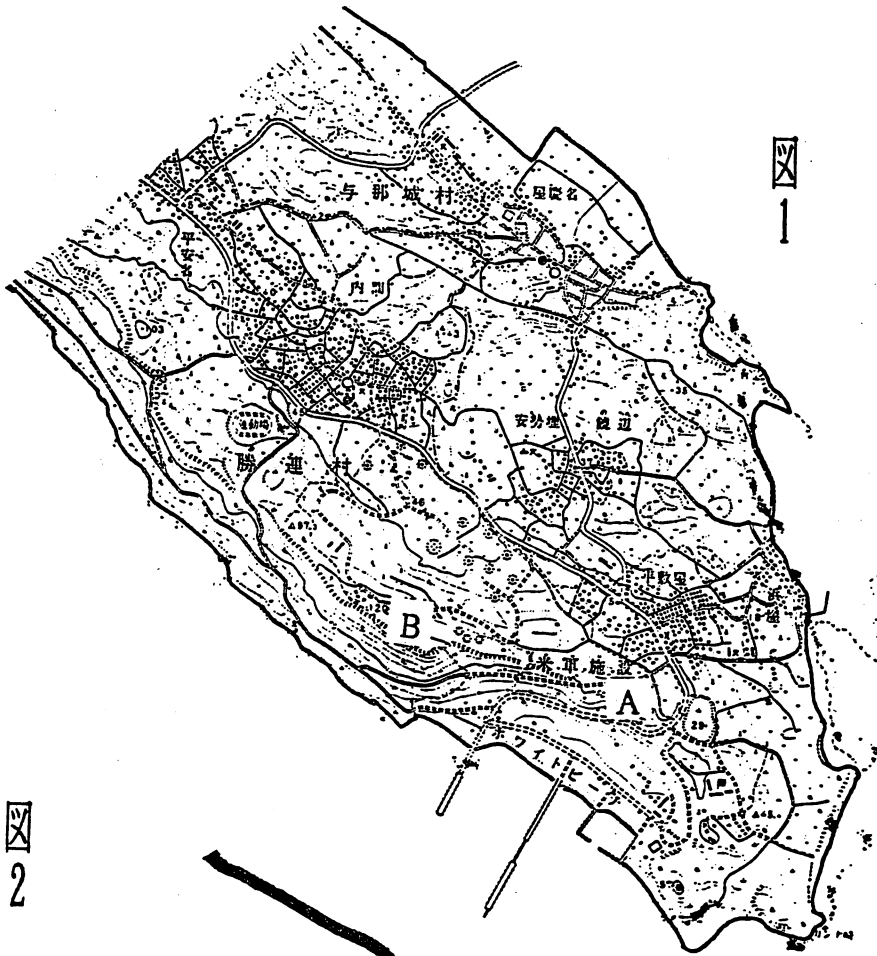
その秘密は意外な大人の動きにあった。大人は、子供が何か考えつくのをねばりづよく待ち、子供の話をよくきき、それに大人の知恵をいれて発言していったのである。

この現象は、大人にあまりに自明(伝承によってAであるという信念のうらづけ)のことなので自信をもたらし、そのことが子どもを前に余裕が生まれ、「子供なりの考えをどうひきだすか。」に関心がいったことによるものと思われる。

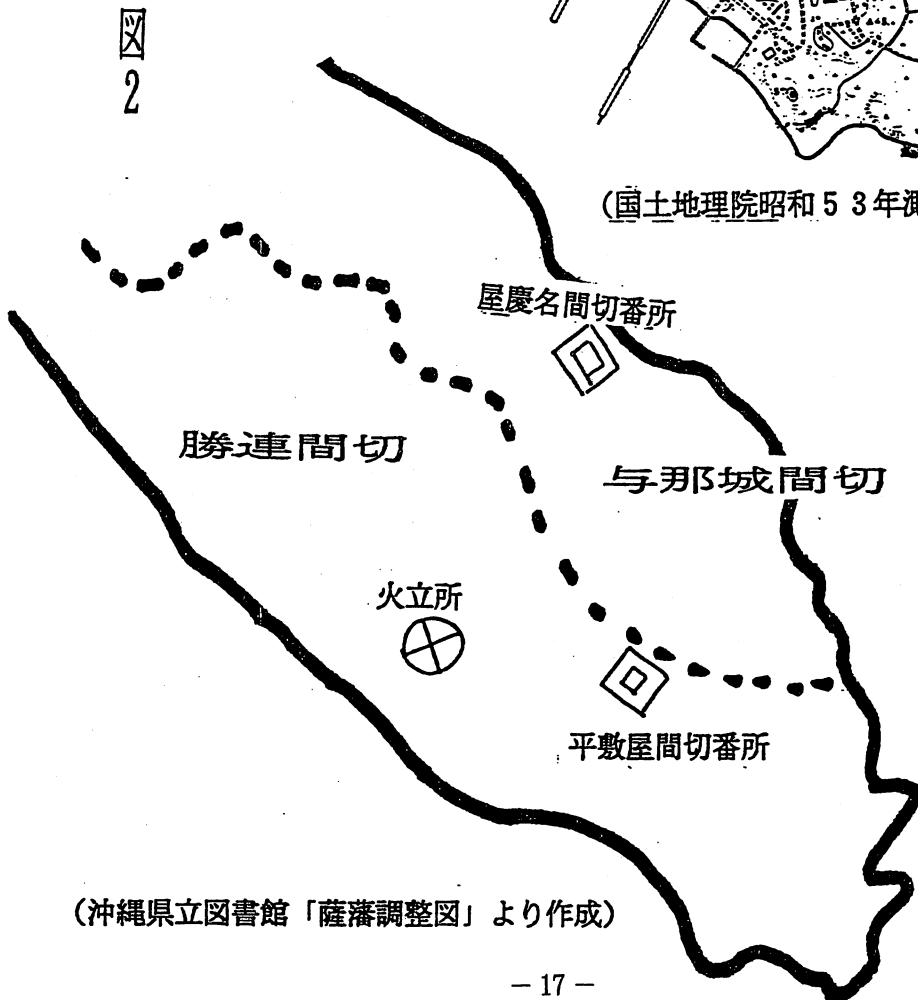
ともかく、「親子教室」は大人だけでは考えられない効果をもたらしたのである。

(里井洋一)

※ 2～4は金城、1・6は里井が担当した。



(国土地理院昭和53年測量より作成)



(沖縄県立図書館「薩藩調整図」より作成)